

とっとり県民カレッジ「未来を開く鳥取学」知事講演  
～鳥取から発信する文化芸術～

平成22年6月5日  
米子コンベンションセンター

皆さん、こんにちは。いよいよこの「とっとり県民カレッジ」が開講することとなりました。今日は満場のお客様にお越しいただきまして、本当に感謝いたしております。今、学友会のほうのご説明もありましたけれども、多くの仲間たち、マナビストがこの場に来ることになります。やっぱり私たちの人生を彩っていくためには、生涯学習という、そういう学んでいくこと、生涯を通して成長していくことが何よりも大切なんだろうというふうに思います。そういう意味で今年もこのシーズンが始まりましたけれども、ぜひとも多くの皆さまにこれから最後まで、開講から閉講までお付き合いいただきまして、今年1年実りの多い年になりますよう心からお祈り申し上げている次第であります。

私どものほうでこういうマナビストの養成ということで始めさせていただきましたけれども、今年も全県で1,000人近い皆さまにご参加いただくことになりました。ここ西部でも多くの皆さまのご参加を賜っているわけでありまして、本当に今感謝いたしております。さまざまな講座がありますので、ぜひ意欲的に参加していただければと思います。今日は私のほうから、文化ですとか歴史とかにつままして少々切り口となるようなお話をさせていただきます。それで今年の県民カレッジ、皆さんと共に歩む第一歩とさせていただきますというふうに思います。

実はパソコンが壊れておりまして、一生懸命今私が場つなぎをさせていただいているわけでございますけれども、今日皆さま方いろんなこととお話ししようと思うんですが、私たちは文化だとか芸術だとかと無縁なところのように思われがちですよね。鳥取、山陰地方といいますと東京のほうから遠く離れていますし、大きな美術館だとか博物館があるわけではありません。ただ、身の回りを考えていただければ、今も相田みつを展が米子市美術館のほうでされております。私もこの間行きましたけれども、本当に素晴らしいですよ。人間ってどういふものかなというのを考えさせられるような、そういう深みのある書を書かれているわけでありまして。相田さんの作品の中で、「にんげんなもの」という書があります。「にんげんなもの」、やっぱり自分には限界があるということを知っているんですね。「今」「ここ」「自分」、その総和が一生である、というふうに書いてあるんです。「今」「ここ」「自分」、それを全部トータルしますとようやく一つの人生が出来上がる。それが私たちの人生だと語りかけてくれているわけです。こんなように、我々の思い出す文化、芸術というものはこの身近でも経験できるんです。

ごらんいただきますと、これは皆さんも見慣れた光景かもしれません。先日、鳥取県立むきばんだの歴史資料館がリニューアルオープンするということになりました。ぜひお越しいただければと思います。入場料を取ろうなんてけちなことは一切申し上げませんので。何せただでございますから、何度来ていただいてもお金はかかりませんので見ていただければと思うんですけれども、その妻木晩田から眺めた日本海であります。美保湾のところですね。向こうのほうに見えるのが島根半島のほうになりますが、弓浜半島がそれに連なっています。あの神話を思い出させます。国引きの神話です。大山に綱を結わえて、引っ張った綱が弓ヶ浜、弓浜半島である。そして、能登のほうからたぐり寄せたのがこの島根

半島だというような神話を彷彿とさせるような光景であります。その手前の海のところに建っているのが昔の住居を復元した、その住居でございます。高床式の倉庫ですとか竪穴式の住居でありますとか。時折火災を出して失敗したりするんですけども、ともかくこうやって元気にやっております、だんだんと村が昔に戻りつつあります。ただ、この村も大変な村です。「倭人は山嶋によりて国邑をなす」。「倭人」、日本人は、この島々の山で国や村、すなわちいろんな国があったというんですね。『魏志倭人伝』。遠い海の彼方、中国の魏という国に残ります『魏志倭人伝』です。有名なものでございますけれども、例の卑弥呼が登場するわけです。倭王の卑弥呼、女王卑弥呼が出てくる。それは、妖術といえますか、そういうものを駆使して国を治めていくという物語があるわけでありまして、こういうように幾つもの国に分かれていた。この妻木晩田の風景も、ごらんいただきますと当時は国があったということを示しています。何せ 2000 年前から 1700 年前まで、そういう長い間にわたる歴史遺産がこの妻木晩田遺跡です。広さ実に 152 ヘクタール。これほどありますと、あの佐賀の吉野ヶ里遺跡をはるかに上回るんですね。それほど大きなものです。そこには実はいろんな部分があるんです。この写真に写っているあたりは洞ノ原地区というんですけども、この洞ノ原地区のところには環濠があります。お堀があるんです。この倉庫のあたりなんです、くり抜いてあるんですね。幅 4 ～ 5 m ぐらいの大きなお堀がありまして、直径 65m の円形に造ってあるんです。そこのお堀の向こう側に、谷を下りるようにして日本海へ続いていくんです。ですから、想像してみてください。なぜお堀があるかという、やっぱりこの国を守るためだったんでしょうね。この下には肥沃な地形があったと思います。そして、その田んぼだとかにふさわしい土地を望みながら、ここには家がたくさん建っていた。今でいうと米子市でございまして、米子市、境港市のような住宅密集地がここにあったわけです。だんだんと時代を経て移り住んでいるんです。ですから、洞ノ原地区にいたような時代もあれば、妻木山地区にいたような時代もあるようです。さらに、松尾頭地区というところがございまして、ここは当時のこの国の中心地だったように思われます。何せ 24 本の大きな柱がありまして、この柱の跡が出てきているんです。でっかい建物があつたわけです。今でいうとこのビッグシップみたいなものでしょうか。そういうでっかい建物がここに建つていたと。恐らく今でいうとランドマークです。ランドマークとかいわれまして、あつたんだろうと思うんです。多分そのあたりがこの国の政治の中心地、あるいは支配者層に当たるような人たちが住んでいたところがあつたのではないかと。いろんなように分析されるんです。非常に面白いです。これほどいろんな時代が錯綜してある所は珍しい。この下には淀江平野から米子へ向けての地形が見えると思います。この淀江平野のあたりにも向山古墳とかそういう古墳がありまして、この弥生の国の時代からさらに後の時代へとつながっていきます。そういう国の中心がここにあつた。

ここには、実は文化の中心もあつたんです。いろんな芸術家たちがいたんだろうと思います。例えばこれは「弥生の匠」というふうに銘打ってありますけれども、同じ時代、青谷上寺地遺跡。鳥取県の東のほうですね。今は鳥取市内になりました。山陰自動車道をずっと行くと青谷のインターチェンジがあります。青谷のインターチェンジを下りたあたりです。この青谷上寺地遺跡は、その青谷のインターチェンジあたり的高速道路を造ろうと思ったら、出るわ出るわ、昔の遺物がたくさん出てきたんです。それをかき集めてみますと、これは大変なことだと。なんと保存状態がいいんだろうかということだったわけであ

ります。なぜかといいますと、湿地なんです。昔この青谷のあたりというのはラグーンのような地形になっていまして、入り江のようになっていて、天然の良港だったんです。ですから、恐らくは大陸のほうから人がやって来たんだと思うんです。今でいう境港みたいなものでありまして、DBSクルーズフェリーが昔は行き来していたというようなことでございますけれども、それが青谷上寺地遺跡のところに来て、だからその波止場に出るようなあたりのそういう遺構だとかいろんな物が出てくるんです。面白いです。

ここから出てきた物にはいろんな物がありますけれども、例えば人間の脳みそが出てきたのは記憶に新しいかと思いますが、脳みそが出てきました。まだプオプオしているんですよ。ちょっと黒くなっていますけれども、頭蓋骨から脳みそが出てきたというのは世界でもあまり例があることではありません。なぜそれほど保存状態がよかったかという、湿地のような形で、要は今でいう田んぼみたいなものですが、あの田んぼを思い浮かべていただくと、ああいう形の中にこういう木製品だとか人骨だとかがあったものですから、昔のままの状態でも保存されていたんです。ですから、ほかにはない物がいっぱい出てきました。骨も、先般実は全国の結核予防大会というのがございました。3月に結核予防大会がありまして、テレビでごらんになったかもしれませんが、紀子様がいらっしゃったんです。秋篠宮妃殿下がお見えになりまして、それで全国から研究者だとか結核予防の関係者が鳥取に集まったんです。そのときにこの米子の鳥取大学の井上貴央先生にお願いしまして、井上先生はこの青谷上寺地遺跡の人骨の研究をされているものですから、その先生にお願いしまして講演をしてもらったり標本を出してもらったんですけれども、実物の昔の骨です。それは、この首の後ろといいますか背骨のところでありまして、脊椎。結核になりますとカリエスというのができるんです。だんだん背中が曲がってくるんです。骨結核とかということを昔は言ったと思いますけれども、その骨が出てきたんです。カリエスになった、ちょっと曲がった骨の状態がそのままの形で出てきていまして、それを展示しまして、紀子様にもごらんいただきました。それから、日本中のそういう研究者と関係者の人にそのカリエスの骨を見せたわけです。そうしたら、帰りごろになりますと皆さんいたく感動しまして、「なんとまあ、鳥取というのは結核のふるさとだったんですね」と言いました。「日本のふるさと」なら分かるんですが、別に「結核のふるさと」だったつもりはないんですけれども。なぜそうなったかという、結核という病気は日本列島になかったというんです。大陸からやってきたんだそうです。ですから、当時渡来人が向こうからいろんな物を文化や芸術と一緒に持ってきたんです。それと併せて結核という病気を持って来ちゃったんですね。それで結核のカリエスが青谷上寺地遺跡から出てきているんですが、別にこれは日本最古に確認されたわけではありませんけれども、多分九州だとかいろんな所でも結核の患者さんが当時もいたんだと思うんです。

そういうようなわけではいろいろな物が出てくるんですが、ここにある物をごらんいただきますと、この木製品であります。下のほう、これは鹿の絵ですよ。今でもいろいろ実を荒らしたりしますけれども、最近では有害鳥獣とかいわれてかわいそうに、鹿でございますが、その鹿の絵があつたりします。それから上のほう、真ん中は高坏（たかつき）でありますけれども、こういう非常におしゃれな、モダンな、今でもその辺で売っていてもおかしくないような形だと思いますが、こういうきれいなデザインの木製品。さらに右側のほう、これは何だと思いますか。これは多分琴だといわれているんです。ポロンポロンと鳴らしたんじゃないかと。その木の天板、てっぺんのところの真ん中を見ますと、月

と太陽みたいなそういうくり抜きもあったりしまして、バイオリンとかでありますけれども、ちょっと穴を空けたりするようなああいうようなイメージかなと思ったりして、一体どういうふうにしてこれを当時の人が音楽で奏でたのかなというふうな興味が湧いたりします。音楽や美術、デザイン工芸、そういうものの中心地だったんです。鳥取県はそういう意味で2000年前、こういうたぐいまれな文化があったということです。その後の時代も続きます。

これも米子市淀江町のあたりですけれども、下のほう、これは上淀廃寺であります、今いろいろと復興しようとして事業をやっておりますけれども、神将の壁画とか山とかいろいろ壁画が出てきました。それで当時も話題になりました。この上淀廃寺があるのは名水のあるあたりですけれども、そのあたりは掘ってみますと、条里制といいます、縦横にきちんと区画されていたんです。今でもほ場整備みたいなことをやりますけれども、あれと同じような感じで四角く整理されていた跡があるんです。それと同じような方向にちゃんと切った形で、この上淀廃寺というものが存在したということが分かっています。整然と文化的に造られた都市計画の中で、農村計画の中でこの上淀廃寺というものがあつた。それは7世紀の後半ぐらいかなという説がございますけれども、そんなようなことであります。

上のほうは石馬であります、石馬谷古墳から出てきた物であります。これも長さ1.5mぐらい、大体私たちの身長ぐらい。大きな物です。この石馬でありますけれども、本州ではここしかないんです。これもなぞだと思いますが、九州のほうではこういう石馬が出ます。その九州のほうでは、この石馬というのは大和朝廷に逆らった豪族の物語と結び付けて研究もされているんです。ひよっとすると、そういうようないろんな勢力がこちらのほうにも影響があつたのかもしれない。交流があつたのかもしれない。

そして、これは出雲大社です。これも平成12年に明らかになったわけですが、大きな丸太をくくるようにして天上にそびえ立たせたということが出雲大社の発掘調査で分かりました。それまでは神話の物語だと思っていたわけですが、こういう天空に大社を設けるといことは物語としてはあるかもしれませんが、それはいわゆる神話の世界でしような、ということだったんだと思います。ただ、右上の写真にありますように、こういうように大きな柱をくくって、それで空へとそびえ立たせていたということが分かってきました。歴史の書を見ますと、何度もこの出雲大社が倒壊しているという記録もあつたりするわけがあります。

下には米子市淀江町から出た土器に書かれた絵があります。赤でくくってありますけれども、これは出雲大社とそっくりですよ。だから、2000年にこの出雲大社の柱が出たときに、これも話題になりました。当時からこういうような建築技術があつたんじゃないかということです。この土器の時代からも思わせるわけがあります。ですから、この出雲だとか、あるいは伯耆の国だとか、こうした山陰のあたり、相当古い時代からこういう建築技術というものを持っていた可能性があるということです。ひよっとするとそういう時代から出雲大社としてこういうものがあつて、信仰を集めていたので土器になつたのかもしれない。その左側にある、これも恐らく建物だというふうに思われますけれども、やはり高層建築的な感じがしますよね。右のほうを見ますと、これは船であります。淀江で船でありますから、一体どこへ行くんでしょうか。恐らくは大陸も含めたいろんな所との行き来が海の道としてあつたのではないかということです。さまざまな文化や芸術の交流の

拠点としてこの山陰に求めたという、そういう歴史を感じさせるものがあります。

その後、歴史は下ってまいります。和歌の世界でも有名な歌がいろいろ出てきますけれども、「立ちわかれ いなばの山の 峰におふる 松としきかば 今かへりこむ」と。在原行平、業平のご兄弟でございますけれども、平城天皇のお孫さんなんですよ。ですから、非常に格式の高い方でありましたけれども、プレーボーイだったみたいです、当時。神戸のほうに行って女性を引っかけたりしまして、そういうようなことが今でも謡曲とかそういう世界に出てくるわけですが、ともかく当時のことですからおおらかな時代ですけども、「立ちわかれ いなばの山の 峰におふる 松としきかば 今かへりこむ」と。別れてしまっても、行ってしまおうかという「いなば」という言葉に引っかけて、「いなばの山の 峰におふる」、生えている松というふうに聞いたらすぐにでも帰ってまいりましょうという、深い愛情を示すというふうにいわれています。実は今この歌が突然朝の連続テレビ小説に出てきまして、皆さんごらんになっていますか、『ゲゲゲの女房』。ごらんになっていますか。ごらんになっている方、手を挙げていただけますか。……相当視聴率が高いですね。この間NHKの局長に聞いたら、山陰で今大体 29%と言っていましたから、今日は 50%ぐらいありますので、暇な人が多いようでございます。そういうわけでこの『ゲゲゲの女房』ですけど、この『ゲゲゲの女房』でも出てきました。主人公の村井布美枝さんですか、劇中では。本名は武良布枝さんでいらっしゃるんですけども、水木しげる先生の奥さまがなけなしの嫁入り道具のきれいなお着物を、一六銀行なんてしゃれたことを言っていました、質屋に出すと。何せ当座の生活費はないし、おなかは大きくなっちゃいまして、もうすぐ産まれるんだと思います。楽しみにしてください。その産まれる赤ちゃんのためにも当座のお金が必要だということでしょう。原稿料は踏み倒されるし、今えらい目に遭っているわけです。かわいそうに。来週もう少し羽振りがよくなってくると思えますけれども、そういうわけで質屋に出さなければいけない。「おばば」と言っていましたけれども、安来のおばあちゃんから頂いた由緒正しい反物であります、それを出すと。だけどそのときに、この反物が質屋に出しても質流れにしないようにというおまじないで付けたのが「立ちわかれ いなばの山の 峰におふる……」という、こういう一句を短冊にしまして付けて出しておりました。実際はあれは流れるかもしれませぬ、この後。とにかくこういうようなことで、この方も鳥取県に赴任していました。大伴家持とか、それから山上憶良も鳥取に赴任していたんですよ。「銀（しろがね）も金（くがね）も玉も何せむに……」ということで、子どもの大切さというものを歌った歌がありますけれども、そういう文人墨客、歌人が昔からいたということです。

近代に入りましても、いろんな巨匠たちが輩出しています。前田寛治画伯。若くしてということで、残念ながら 44 歳で生涯を閉じられたわけでありまして、長生きしていればもっとたくさん作品が世に出ていたと思います。ここから程近い北条砂丘のほうからお生まれになりまして、パリのほうで修行されたりしていたわけですね。右上のほう、有名な絵であります「棟梁の家族」ということであります。昭和の初年であります、前田画伯のアトリエを新築した棟梁の家族をモデルにしたと。前田画伯は、一つにはこういう人間というものをすごく大切に描くんです。その中にちょっとしたドラマを感じさせる。この赤に色使いなんかもきれいですよね。それから下のほう、これも帝展のほうで特選を受賞した傑作といわれていますが「横臥裸婦」であります。こういう裸婦の像を描くのも写実主義でございまして、この前田寛治はフランスでもクールベという画家に非常

に傾倒したんです。クールベというのも、鳥取県立博物館のほうにも所蔵品がありますけれども、写実主義の名手というふうにいわれていまして、写実主義なんですけれども一つのドラマ性のある、詩情豊かな感じもするそういう写実主義であります。やっぱり絵というのは隅々まで丁寧に描かなければいけないという、そういう論を述べるわけです。その前田寛治も、クールベの画法というものを自分でも論文として出されています。下のほうの裸婦がございましてけれども、手の指や足のつま先に至るまで丁寧に寸分違わず描かなくてはならないと、こういうことを言っているんです。そういうような写実主義の旗手がありますが、また風景画とかも描かれています。後世にもいろんな影響を与えた、鳥取県の中でも前田寛治先生など傑作を残した画家が輩出しているわけでありまして、伊谷さんもそうでありましてね。伊谷さんなんかも真っ赤な山を……。人や山なんかを描かせると素晴らしい画家でありますけれども、そういう画家が輩出しています。

それから、辻晋堂先生。これは彫刻のほうの異才というふうにいわれていますし、国際的にも非常に評価の高い彫刻家であります。下のほう、それから横のほうにございまして、こういう特徴的なフォルムをえぐり出すようにして作っていくわけでありまして。この2つとも彫った上でそれを焼くような技法を使って、いろんな技法を使っておられますけれども、いわばそういう天才的な、そういう奇才であったというふうにいわれているわけでありまして。

また、文人たちも多く鳥取県を訪れています。この近くでいえば、志賀直哉も『暗夜行路』を書きましたけれども、大山の山の上のほうで実際にいたときのイメージを大事にして『暗夜行路』の最後のあたり、奥さんに対する和解といいますか許すというか、そういう切ない心情をつづるような部分があります。そこでも登場する場面というのは、朝の夜明けのころ、ずっと大山のほうを登っていきますと、そこから見えた風景ですよ。大山の大山寺のあたりを思い浮かべていただきたいと思います。遠くのほうにだんだんと光が差ってきて、それが中海のほうに下りてくるような、そういう光景を書いて、非常に詩情豊かな世界を文芸の道の中で描き切っているわけです。その後、最後のクライマックスのほうに行くわけですが、このように文人墨客も訪ねるわけでありまして。

砂丘もそういう舞台になりました。この「砂丘」という名前が付いたのは、有島武郎が名付けたというふうにいわれるわけでありまして。「浜坂の遠き砂丘の中にして 侘しき我を見出でつるかな」と書いているわけです。この有島武郎が、「浜坂の遠き砂丘の中にして 侘しき我を見出でつるかな」と書いた心情はいかなるものだったかということがあります。砂丘に行ってくださいますと、当時は「鳥取砂丘」という名前が付いていません。そのときに「砂丘」という、多分馬の背のことでしょう、あのあたりの下のほうに入り込んだんでしょう。遠き砂丘の中にしてたった1人自分がいるという、そういうわびしい……。 「侘しき」というふうに書いてあります。これは「寂しき」というふうにつづっている記録もあるんですが、城崎温泉に残されているものと「侘しき我を見出でつるかな」が正しいのではないかといわれていますが、「侘しき我」が見えてきたかなということですね。この1カ月後に有島武郎は自ら命を絶ったんです。何でかといいますと、今でいうと不倫ですよ。不倫騒動でありまして、最近ワイドショーでは珍しくないんですが、当時は珍しかったんでしょう。だいぶん話題になりまして、この歌を残した1カ月後に文豪・有島武郎が愛する人と情死を遂げるといってございまして、そういうようなことになりまして、砂丘というのは急に有名になったんです。鳥取の砂丘ということで、それで「鳥取砂

丘」というのがいろんな人に知れ渡るようになりまして、名前として定着してきたと。

高浜虚子なんかもそういうことで砂丘を訪れていますよね。「秋風や 浜坂砂丘 少しゆく」と。そういう、非常に情景の思い浮かぶ歌をやるわけではありますが、与謝野晶子は配偶者の鉄幹と一緒に訪れていますけれども、与謝野晶子はこういうように詠んでいます。「鎮まれと抱ける山のこころをば 今よく知れる北の海かな」、もう一つが「砂丘踏み さびしき夢に与かれる われと覚えて涙ながる」。これは、有島武郎の歌を頭に置いていることをお分かりいただけたと思います。砂丘にやって来て、有島武郎が「侘しき我を見出でつるかな」というふうには詠んだわけではありますが、「さびしき夢に与かれる」というのは実は意味深でありまして、「関与する」という意味ですからね。「われと覚えて」、私と思ひ起こされて涙流れたと。恋多き女といわれた与謝野晶子でございますので、一体どんなことが有島武郎とあったのかなと思わず想像してしまうわけではありますが、文学の世界でもいろんなドラマをこの鳥取県から起こされているんですね。

こういうように、実は文化や芸術に非常に親和性のあるのが鳥取だと思われまます。尾崎放哉も鳥取県の出身でありました。実は米子に住んでいたこともあります、子どものころ。それから東京大学、帝大のほうに行きまして、金融会社に入ったわけではありますが、失意のうちに放浪生活へと入っていくわけでもあります。優れた句を出したわけですが、京都から小浜のほうに。小浜というと福井県の小浜でございます、大統領のオバマではないんですけど、福井県の小浜のほうに行きまして、最後は小豆島のほうで、南郷庵（みなんごあん）というところでございますけれども、そちらのほうで最後を迎えらる。小さな庵です。寺の末寺みたいなところの庵でありまして、海が見たいということだったらしいんですね。尾崎放哉は死期が近いと悟ったんでしょう。結核を患っていました。当時のことですから、結核を患っていていづれということもあったんでしょう。そのときに、台湾へ行けという話があったんですね。しかし、台湾じゃなくて海が見える所に行きたいということで、当時の仲間から紹介されまして、お寺の住職がやはり歌の仲間なんですけれども、そちらのほうに寄宿するような形で結局最後の、わずか1年2年だったと思えますけれども小豆島のほうに行かれるわけがあります。実は尾崎放哉は家族とはほとんど絶縁状態でありまして、鳥取のことをあまりよく思っていなかったかもしれません。当時のいろんな記録を見ますと。ただ、鳥取が生んだ偉大な自由律の俳人です。「咳をしても一人」、結核を患っていたことを思い浮かべていただければと思います。「いれものがない両手でうける」とか、「春の山のうしろから煙が出だした」。これは、死出の旅路に出たそのときにつづられていた歌です。「春の山のうしろから煙が出だした」と。ちょうど野辺送りのようなそういう煙が見えたのかもしれませんが、この一つの句の中に、私は尾崎放哉がさすがしくこの世から旅立っていったのかなと、そんなような思いがしてならないのであります。いろいろと紆余曲折のあった人生でありましたけれども、最後「春の山のうしろから煙が出だした」、それをごらんになったのかもしれませんが、自分自身の野辺送りを見たのかもしれませんが、いづれにしてもそういう人生であったということでもあります。

童謡・唱歌もそうですね。岡野貞一さん、「ふるさと」「春の小川」、いろんな名曲がありますけれども、そのほかにも田村虎蔵さんとか永井幸次先生とか。永井幸次先生は大阪音楽大学をつくった先生でありますけれども、こういうふうに音楽の世界もいろんな人が輩出しているんです。最近も音楽の世界なんかで鳥取でも出られるわけでありまして、最

近、資生堂のコマーシャル。お気付きになったかもしれませんが、資生堂のコマーシャルで、ちょっと前ですか、頭を丸刈りにした女の子がいますね。ボーイッシュに。ICONIQ（アイコニック）という名前なんですけれども、あの子は東部の鳥取市の出身の子です。ああいうふうにいるんなタレントさんが今出てきておまして、鳥取県西部で今一番有名な女性というイモトアヤコという女性だと思うんですが。生まれたときからまゆ毛がつながっていたわけではないと思うんですけれども。あれは書いたらしいんですが、ああいう方とか司葉子さんとか、宮川大助・花子の太助さんとか、今そういういろんな有名人も出てきています。

そういう意味で、こういう歌の世界も昔から。三木露風さん。三木露風さん自身ではないんですけれども、お母さまが碧川かたという方でありまして、この人は女性の国政参加だとか、看護師さんもしていたんですけれども、そういうような運動をされていた方です。実は碧川かたの前の夫が三木露風の父親、ご自身も三木露風の母親であります。残念ながら離縁して別れていったということだったんですが、だから三木露風は孤独だったんですよ。このお母さんは鳥取藩の家老の家です。今でいうと、鳥取地方裁判所がありますが、あのすぐ裏側のほうといますか、山側のほうに行ったあたりに碧川かたのご実家が今もあります。そこのご出身で昔の家老さんですから、お城のすぐ近くだったんでしょうね。そこから兵庫県の龍野にお嫁に行きまして、そして露風をもうけたということでもあります。だから、この歌の中に切なさがありますよね。幼いころに別れた母親をなんとなく彷彿とさせるような、「夕焼小焼の、赤とんぼ 負われて見たのは、いつの日か」ということを書いているわけです。私は子どものころ、小学校で覚えますので、「負われて見た」というのは追っかけられたということかなと小さいころは思っていましたけれども、だんだん大人になって字が分かるようになりますと、背負われて見たということが分かってきたわけですが、露風はその後トラピスト修道院、北海道のほうに渡りまして先生をされたりして、勲章も受けられるぐらいこういう歌の世界などで作詞家として活躍されました。

それから、最近さらにまた注目を集めているところが吉田璋也さん。今でいうとプロデューサーだということで、「民芸のプロデューサー」と書いてありますが、もともと医者さんでございます。鳥取駅の近くに今でも医院の跡がございます。昨年ですか、一昨年から、公開しまして中に入れてくれる機会がありまして、昔は診療所としても使っていたから記憶しておられる方もたくさんおられるわけですが、それはまあおしゃれです。お医者さんが座るいすなんかも、吉田先生が座っていたわけですが、ちょうど花びんの花台のような感じでございまして、細長くすらっとしたそういう背もたれ。そういうスリムないすを作っているわけです。実はよく工夫されていたそうでした、下のほうは、吉田璋也がデザインしますのは畳の上でも置けるように工夫がしてあったり、いろんなことをされたわけです。この吉田璋也は柳先生と出会いまして、それで民芸の大切さということを考えるわけでありまして。民芸というのは身近にある用の美というわけですが、用いることの美しさ、用いられる物の美しさ、日々使いの中にあるようなそういう美しい物というのを大切にしようじゃないか、それから新しい芸術を起こそうじゃないか、という運動です。その吉田璋也さんはこの民芸というのを始められまして、五郎八さんという牛ノ戸焼ですが、白い器がありますが、小林さんという方ですけれども当時不況でだいぶ困っていたらしいんですが、新しいこういう民芸運動を起こそうじゃないか、一緒にやりませんかということで、吉田璋也さんがいろいろとアドバイスをしたりして、プロデュ



ースをしていくわけであります。この牛ノ戸焼だとかこういうものを世に出していくわけですけれども、当時は東京にたくみ民芸店の支店を出しまして、そこで販売したりしまして、「鳥取は新作民芸の発祥の地だ」ぐらい言われるようになるわけです。今でもその伝統は息づいていまして、染分皿といわれる緑と黒に染め分けたお皿とか、ああいう物が今でも作られたりしていますけど、当時の民芸運動の流れが今でも鳥取は息づいているんですね。それは誇るべきことだと思います。実はそういう染分皿も、最近若い人たちの間で売られています。今は吉田璋也のプロデュースということではなくて、渋谷だとか大阪だとかそういう所に店を出していますが、BEAMS（ビームス）という若い人向けのショップがありますけれども、そういうところでそういう染分皿みたいな物を、かわいい皿だということで結構な値段で売られています。そういうふうには、今でもこういう民芸運動というのは続いてきているわけです。吉田璋也さんは、一つのセンスを持って物事を考えていたんでしょね。湖山池という池があります。日本で一番大きな池だと東のほうの人はいばっていますけれども、大して大きさではないですが、その湖山池のほとりに阿弥陀堂という名前の建物を建てまして、茶室でありますけれども、吉田璋也さんが造られました。やっぱりおしゃれなんですね。窓ガラスで前面の湖を眺めるようにしまして、それを八角形に切ったような建物にしてあるわけです。八角形ですからね、あまりそこから見かけるような建物ではありません。その阿弥陀堂に入ってそこから見ますと、目の前の島、それから横に小さい島がぼこぼこありまして、いかにも阿弥陀三尊が目の前のこの池の中に、こちらに向かって拝んでいるかのように見えるんです。そういうような一つの心象世界といえますか、そうしたものをプロデュースした吉田さん。この民芸というのはこれから一つのキーワードになるんじゃないかと。鳥取県の地域づくりにも生きてくるんじゃないかというふうに期待しているわけであります。

一番左、ご当地植田正治先生であります。境港の写真家でございますけれども、世界中に名前も売れまして芸術文化勲章シュバリエ、騎士、ナイトの称号をもらったわけでございます。大変なものです。この植田先生、上のほうに写真がありますが、これは「少女四態」です。こういうように構成的に作られるわけです。大山ですとか、あるいはまちなかの風景とか、それから砂丘ですとかね。そうした所を舞台にしてやったわけです。

それから右のほう、前田昭博さん。陶芸家でありまして、今年のシーズンの中で、西部ではないかもしれませんがやはり講師で講演されることになっています。紫綬褒章をついに受賞されたり、陶芸家協会賞を受賞されたり、通商産業省の関係の賞とか数々受賞されています。この若さで紫綬褒章、ちょっと頭が若めでないですけど、とても若い方でいらっしやいまして、この若さで紫綬褒章をとられているわけでありまして、これから恐らく日本の陶磁器を背負って立つ方だと思います。真っ白い白磁。きれいですよね。私もこの前田先生の作品は本当に好きなんですけれども、結局白磁というのは真っ白なんです。一つの色です。実はこれは本当は真っ白ではないんです。よく見ますとちょっと緑がかかった色を使っていたり、少しピンクがかかった白を使ったりするんですけれども、大切なのは、面取りをするということ。こういう面をきれいに、シャープに切るんですね。シャープに切ったような形にして、そこに自然の光が当たるわけです。そうすると、この写真で見ていただくと分かるように、あたかもいろんな色が重なり合っているかのように見えるんです。白だったはずのものが、実は虹のように輝いてくるような感じがします。それが立体的な造形と一緒になりましてね。ただ、前田先生も最初は苦労されたそうです。大

阪芸術大学を出られたわけでありすけれども、この陶芸の世界に入られて、それで鳥取に帰ってきて、鳥取の河原町のほうで窯を開くわけです。ただ、なかなかうまくいかないと。だいぶん投げたこともいっぱいあったそうです。そういう中で苦労してこういう作風を作られて、今では陶芸界の第一人者にまでのし上がってきたということです。

真ん中は柴山抱海先生でございますけれども、書道は鳥取県内にもたくさん、いろんな先生方がいらっしゃいますが、柴山先生は先般もアメリカのカリフォルニア州のほうに行かれまして、大きな字を書くわけです。一種のパフォーマンスです。最近、映画の影響なんかもありまして、書道が女の子の間ではやり始めているようでありますけれども、ああいうパフォーマンス的な書道もこの先生はされるものですから、向こうのカリフォルニアのバークレーという大学のところの施設で今回されたそうでありすけれども、向こうの人たちは大変びっくりされたそうです。フランスのパリのほうとか、モスクワも行かれたんですかね、各地行かれて日本の書道というのを世界中に広めようとされておられます。もともと学校の先生でいらっしゃいますけどね。

デザイン関係でもいい話題がいろいろ出てきております。例えば、このグッドデザイン賞。2005年度と書いてありますが、これは青谷の和紙です。谷口和紙さんの作品ですけれども、こういう立体的な紙をすく技術を開発したんです。紙すきをされたことのある方はたくさんおられると思いますけれども、こういうふうにならぬとちよこちよこやりまして、そうするとだんだん水が落ちこちてきて、そこにふわっと残ったのが紙であります。これは和紙です。この和紙を立体的にすく技術を開発しまして、どうやるのか僕はいまだによく分からないんですけれども、開発したのは事実でありまして、それを駆使してこういうようないろんな作品を作っているんです。最近家具にもこういう物を組み合わせたりしまして、和紙から仏壇を作ったりしています。例えば、これは大阪の会社が全国に向けて売り出したりしているんですけれども、こういう小さなものであります、和紙というと柔な感じがしますけれども、和紙を硬く作るんです。まるで木材みたいに。その中にろうそくを灯したりしますと、本当にきれいになる。都会の人が、あまりスペースもないので小さな仏壇をといるときに、ちょっとおしゃれな仏壇でいいんじゃないかなということで開発されて、今出されています。

この方だとか、家具やさんだとか木材関係とかが一緒になりまして、今「トトリプロダクツ」というデザインの情報発信をしています。非常にセンスのあるおしゃれな家具を作って、「トリノプロ」、「トリノス」とか、そういうブランド名を付けまして売り出すようになってきました。そうしたらこれがとうとうテレビドラマになりまして、何だと思いません。皆さんもひよっとするとごらんになっているかもしれません。視聴率でいいますと、『ゲゲゲの女房』と同じぐらいの視聴率があるんですけど、『月の恋人』という月曜の夜9時から木村拓哉が……。キムタクです。キムタクが鳥取の家具を使っているんです。すごいですね。そこまでやってきましてね。だから、よく注意してエンディングロールといひますかあれを見ていると「鳥取」の文字が出てきますから、楽しみにしていただきたいと思ひます。それから右のほう、グッドデザイン賞、スーパーはくとであります、スーパーはくとにもさっきの因州中井窯だとかこんなものを使ひまして、皆さんびっくりしました。今ほとんどあらゆる賞を総ナメです。デザイン関係。それぐらい人気が出てきました。

さらに伝統工芸、復活もあります。弓浜緋。これは弓浜半島の特産品でした。もともと

は浜綿の世界ですから、最近その浜綿を復活させようというふうな動きがあります。このあたりは季節になりますとセイタカアワダチソウがきれいな黄色い花を咲かせるわけですが、セイタカアワダチソウを栽培するぐらいだったら綿を植えたほうがいいんじゃないかということでございまして、境港の農業開発公社はそういうことで浜綿生産を始めましたし、今いろんなグループがやるようになりました。要は休耕田対策だとか、そういうことがあるわけでありまして、それをさらに糸によっていきまして、そして織り上げていく弓浜緋。これも今復活しまして、平成19年からは後継者育成事業として研修を始めました。若い人です。いずれも20代の男性、女性ですけれども、3名の人がこのたびこの6月で卒業だと思います。いよいよ今度は社会に出て、新しい事業を興すだとか、後継者のさらなる育成に回るとか、これから回っていくんだと思いますが、この弓浜緋も今非常に引き合いはあるんです。確かに、昔に比べますとだいぶん緋の反物の需要は落ちているかもしれませんが、それ以上に実は生産者が減ってしまっていて、ですから一つのビジネスを作っていくかというところでやっているわけです。また、この浜綿も高級布団の材料になりまして、今時はほとんど輸入品ですからね。洋綿です。綿というのはあまりありません。そういう意味で珍重されまして、復活を遂げていると。こういう伝統工芸だとか、今ずっと縷々申し上げてきたようないろんな文化芸術、実は鳥取はその舞台としての資格はあるし、実績もあるということをご皆さんに知っていただきたいと思っております。

さらに新たな伝統に挑戦しようと、智頭町の女性たちが立ち上がりました。これは藍染めですけれども、きれいですよね。「ちずぶる一」というグループなんですけれども、こういうハンカチだとかのれんだとか、そうした物を作っています。これも自然の色合いでして、自分たちで工夫しながらやっているんです。素晴らしいのは、この藍も自分たちが山に植えているんです。その植えた藍を収穫しまして、それを染料として使っている。100%手作りなんです。手作りのものですから数が出ないもので、通信販売だとかそういうことで出しているそうですけれども、全部完売していくというぐらいです。今までの歴史や伝統の中、いろんな技術の中から、今私たちもチャレンジしていくものっていっぱいあるんじゃないかなと思うんです。

こういうように、鳥取県には文化や芸術の実績、歴史がありました。さらに、今、多くの人たちが文化芸術活動に取り組んでおられます。これは平成14年、「夢フェスタとっとり」の風景です。フィナーレ、右下ですね、懐かしいと思います。ここのホールです。多目的ホール。それが平成14年の最後でした。ここでのフィナーレが終わりまして、各県から来た人たちを会場の外へと送り出すわけですが、外では手作りのキャンドルライトを持って、ペットボトルのキャンドルサービスをさせていただきまして、そしてみんなで「ふるさと」を歌ったり、そんなような懐かしい思い出がよみがえってくるかなと思います。このときも多くの方に参加いただきました。1,726団体参加しました。ごらんになった方は実に全県で74万人を数えるというほどの、1カ月かけた盛況ぶりになりました。

昨年は「日本のまつり2009鳥取」。これも県下一円で実施いたしましたけれども、特に東部が主会場になったわけでありまして。左のほうをごらんいただきますと、勇壮なこちらの「がいな祭」の万灯です。米子がいな万灯振興会という皆さんが出てこられたわけがあります。ちょっとこれは見づらいですけれども、この後ろのほうかな、実は一緒に演技をしてくださったのは秋田の竿灯の皆さんでありまして、昨年の秋ですけど、10月、11月というのでさせていただきましたが、秋田の竿灯の皆さんとこの「日本のまつり」をやる前

に韓国で出会う機会があったそうで、話し合ったそうです。そして、鳥取のほうの「日本のまつり」でも一緒にやりましょうということで、夢の共演をしたんですよね。と申しますのも、秋田の竿灯の人たちは、米子の万灯はまねをしてただどりをしたというふうに言っていたわけでございまして、一時期は非常に陰悪なムードが漂っていたわけでございまして、そんなものは認められんと言っていた時期もあったわけですが、皆さんもよく見ていただきますと、最近米子の万灯も下のほうを少し削りまして、お米のような形になっています。これはちょっと担ぎづらいんですけども、そういうことでこの万灯とは住み分けをするということにして、今年の秋、鳥取のほうに秋田にも来ていただきまして歴史的な和解を遂げたわけでありまして、ベルリンの壁が崩れた瞬間でしたが、そういうようなことで楽しくイベントをしました。「まつりをせんとや 生まれけむ 踊りをせんとや 生まれけむ」をテーマにしまして、来場者 13 万人を数える大会になりました。

また最近「食のみやこ鳥取県」、大変に元気になってきています。クロマグロも、右下にありますけれども、先般 1,500 本の初水揚げがありました。今ちょっと失敗していますのは、国のほうがクロマグロの漁獲制限をやるかというようなことを言っていて、ちょっと心配をいたしておりますが、こういうようないろんな物がありますけれども、食文化なんですよ。例えば上のほうですと「いただき」、あるいは「とうふちくわ」とかもそうありますが、結構豆腐に関係する物が多いんです。これは、鳥取藩の藩主・池田光仲公が豆腐を勧めたんですね。魚というのは贅沢品だからいけない、豆腐を食いなさいとか言って、はいはいとってみんなでいろんな物を作って出しまして、「ののこめし」、またの名を「いただき」といいますけれども、「とうふちくわ」とかこんな物が生まれてきたわけでありまして、鳥取県の食文化というのが出てきたんです。これも一つの文化だというふうに思います。

こういう食文化であります、最近では進化してまいりまして、「B級グルメ」とかということ言うようになりまして。私たちが普段食べるような物、そういう食文化を大切にしようじゃないか、こんなおいしい物がありますよ、ということです。米子もいろいろとおいしい物がたくさんあります。境港もそうありますが、海鮮丼。境港は海鮮丼のまちになってきて、あちらの店もこちらの店も競争状態でありまして、マップまで作ったりしています。最近では「まぐろラーメン」というのを始めた。これも、米子駅の2階とか、水木しげるロードの端っこのところとか、いろんな所のお店で扱うようになってはいますが、このまぐろラーメン対決を昨年やりましてね。九州の鹿児島は串木野がまぐろラーメンの本拠地なんです。鳥取は、そういうのを勉強しながら独自のまぐろラーメンを作りまして、それで本拠地の串木野から向こうの名店に来ていただきまして、夢みなとタワーで去年、暑い時期だったと思うんですけどラーメン対決をやったんです。私もそうでありまして、境港の市長さんもそうだったんですが、審査員をさせていただきました。ルールがありまして、3つボールを持っていて、その3つのボールをどちらかいいというほうに、2対1でも3対0でもいいですから入れてくださいということでありまして、境港の市長と私、それからあと何人かいて、会場のいろんな皆さんもそれぞれにボールを持っています。私と境港の市長は横で見ながらどうするかと思って……。同じことをしてはいたけど。2対1で鳥取の勝ちにしていたわけですね。ただ、圧倒的多数の反対意見によりまして鳥取は負けちゃったんです。鹿児島に軍配が上がりまして。まあ遠くから来たんですから。確かにおいしかったです。鹿児島のまぐろラーメンはさっぱりしていました。や

やっぱりマグロのイメージですね。お魚ですから、ヘルシーな感じにしてあったんだと思うんです。鳥取のまぐろラーメンのほうは随分凝った作りにその日はしてはしまして、わざわざトロ身をあぶったりしまして、それで少し脂みが出るようなことをやってチャーシューみたいな感じにしたりして。おいしかったんですけども、会場には大阪の人やいろんな人がいましたが、やっぱりあっさり系の、まぐろラーメンらしいほうに軍配が上がったのかなと思いました。

こういう新しい食文化がどんどん生まれています。例えば左上、「琴浦あごカツカレー」というのを始めてはしまして、トビウオのカツを作りました。トビウオのカツというとうどうやるのかなと思ったんですけど、私は食べてみたんですけど、おいしいです。この「あごカツ」は、アゴをそのままカツにしていないですね。恐らくあれは何かのすり身を混ぜているんだと思います。そういうはんぺん状にしたものをフライにしたんだと思いました。

さらにこのグルメストリートは進化してはしまして、次々に新しい料理を出そうしてやっております。「鳥取牛骨ラーメン」というのが下のほうにありますね。これはNKT、日本海テレビ、日本テレビ系でバラエティー番組がありまして、全国ご当地最新B級グルメ大会準優勝ですよ。2位。大したものです。バンクーバーの浅田真央ちゃんと一緒にですから。「牛骨ラーメン」大したもの、全国2位になりました。牛骨ラーメンは今中部のほうで非常に隆盛を極めているんですけども、もともとは米子のもんです。ご存じかもしれません。私も時々行くんですけども、外浜のほうをずっと上がっていきますと、ガソリンスタンドの向こう側をちょっと入ったところに「満洲味」というラーメン屋さんがあります。こういう場であまり個別の店の宣伝をしてはいけません。そこは満洲から引き揚げてきたんだと思うんですけども、向こうのラーメンの作り方を引っ張ってきまして、牛骨でダシを取ると。これが、弟子がついたんだと思うんです。もともと中部の和食系の店がラーメンを始めたんですけど、それがだんだんと広がりまして、今中部を中心として「牛骨ラーメン」というのができてきた。今、行列までできるような騒ぎになりましてね。調子に乗って「牛骨ラーメンバーガー」というのを作って、バンズといいますけど、パンの代わりに麺を揚げた物を使って、これは結構おいしいんです。琴浦町の「たかうな」というところで売っています。

それから右のほう、「とっとりバーガーフェスタ」、大山。去年の秋にやりました。伯耆富士が誇る景勝地でありますけれども、こちらのほうの柘水でやりました。柘水は最近また快挙がありまして、つい先般も「恋人たちの聖地」になりましたから、ぜひ皆さん愛する人と一緒に行っていただければと思います。「恋人たちの聖地」になるには条件があるんですってね。私も知らなかったんですけども、夜景がきれいじゃなくてはいけないんですって。僕はあそこで夜景はあまり見たことがないんですが、多分米子の街のほう、弓浜半島とかきれいなんでしょうね。何で夜きれいな所じゃないといけないんでしょうかね。「恋人たちの聖地」ですからいろいろあるんだと思いますが、その「とっとりバーガーフェスタ」、今年は全国大会をやろうとって今準備しています。

それから、海外と色々な芸術文化交流をやるということで、ついこの間も韓国で大会をやりました。写真だとか、絵画だとか書だとか。さらに子どもたち。下のほうは日野高校の子どもたち、それから右のほうは智頭農林高校の子どもたちですけども、台中県だとか台湾とか韓国に出かけて行って交流するようになっています。鳥取の文化も海外と交流しています。

いろいろな文化芸術のメニューがあります。身近なところでは市役所などでやっておられます、公民館のいろいろなメニューに参加されたいと思います。さらにもっといろいろなことをやろうと思いますと、こういうふうに文化芸術活動の支援の仕組みもあります。ぜひ皆さんも挑戦していただきたいというふうに思います。

さらに、最近ではポップカルチャーというんですか、大衆文化。鳥取も今いろいろな話題が出てきました。一つは漫画王国です。水木しげる先生だとか、あるいは青山剛昌先生。さらにマンガサミットを誘致しよう。この秋に、韓国の富川（プチョン）という所で国際マンガサミットが開かれます。そこに私も行こうと思っていますけれども、誘致を決めてきたいと思います。今、日本側では、里中満智子先生だとかあいう方々が中心になって選ばれて、日本では鳥取を推薦しようということになったんです。あとは、世界の舞台で選ばれればというところまできています。

それから、中華コスプレというのもやっています、中国庭園の燕趙園が最近ではコスプレの聖地になっておりまして、春と秋に大会があるんですが、春のほうは全国大会で、秋のほうはアジア大会とかやっています、世界中から集まるようになりました。これはばかになりません。本当にすごいです。熱気があります。皆さん、あそこで写真を撮るのがいいんですって。中国庭園でコスプレをして、写真を撮るために参加するという人たちなんです。そのために宿泊代も出して、中には移住してきた人もいます。すごいものです。

さらに『ゲゲゲの鬼太郎』の関係で、「ゲゲゲの鳥取県」ということであります。『ゲゲゲの女房』、ぜひ皆さま見てやってください。放送開始時は過去最悪の視聴率だったんですが、今ぐんぐん伸びています。この会場の皆さんは熱心なファンが多いとお見受けしましたので、ぜひ応援していただければと思います。ますます面白くなります。NHKの回し者でございますが。

それから、『銀色の雨』。これは米子、あるいは境港、大山、琴浦、さらにあちらの出雲のほうも登場しましたが、素晴らしいドラマでありました。これも下町の風情なんかが出まして、旧加茂川で殴り合いの乱闘シーンだとか。随分寒かったと思いますけど、役者も大変ですね。特に、多くの人たちが賄い隊だとかで協力していただきました。だから、成功を収めたと思います。今度は一畑電鉄の『RAILWAYS（レイルウェイズ）』という映画が始まりましたけれども、こういう映画も舞台として山陰が選ばれるようになってきた。うれしいことだと思います。

そこでさらに今度韓流ドラマ、やって来ます、鳥取へ。水曜日の夜9時、今『IRIS（アイリス）』というドラマをやっていますけれども、この間大阪城ホールに行っていました。『IRIS』のコンサートなんですね。それでプロデューサーが来られていたんです。何せ大騒ぎしています、今週は東京のほうでコンサートをやったそうですけれども、チケットの売り間違いがあって騒動になったらしいんですが、イ・ビョンホンさんとかキム・テヒさんとか、本物がいっぱいことやってきてそれはそれは大騒ぎです。最近話題の、若い人たちの好きなグループなんかも来られていまして、大変なコンサートだったので、そのためにプロデューサーの社長が来られていまして、そこに直談判いたしましたところ、では鳥取県でロケをしましょう、ということになります。これはアクションドラマです。韓国版007です。一体何をするのかよく分かりません。ちなみに私は、別れ際に「知事さん、受け入れを決めるに当たりまして一つお願いがあります」「何でしょうか」「ヘリコプターを貸してくれませんか」と。何に使うんだらうかと。この間秋田県で受

け入れたんですけども、秋田では列車を貸したんだそうです。列車を爆破したいということだったそうです。「ちょっとヘリコプターは高いんですけど」、そうしたら空から撮影用だと言ってくれたのでよかったんですけども、それだけではないんです。実はあちこちロケ地候補を今から探すんです。7、8月にまた大騒ぎになると思うんですが、やって来ます。その下調べに4月の末に来たんです。何を調べて回るかという、いろんなことを質問するんです。それはふるっています。境水道大橋、気に入ったみたいです。「この景色は素晴らしいですね」と。「ここから飛び降りるシーンは撮れますか」と。まあ楽しみにしていただければと思いますが、『アテナ』というドラマになるそうでございまして、今年の夏の終わりから秋にかけて収録するそうであります。

それから、アーティストリゾートをつくろうと、今、世界中からそういうことでやって来るようになりました。これは国際現代美術展でありますけれども、下のほう、テレビがずっと並んでいます。全部放送前のザワザワとしたシーンです。テレビのブラウン管がずっと並んだこれもアート作品です。そういうふうなものをこういうような学校だとかというような所や病院だとかでやるんです。

これは湯梨浜町。湯梨浜町は、廃校を利用してアーティストにアトリエにしておうということを始めしています。岩美町でもそういう小学校をアトリエにして浦富焼とかやっているんですけども、ここも焼き物とか染色。まだ2部屋ほど工房が空いているようですが、一般の人に貸し出して入っていただこうと。そういうようにアーティストリゾートということ鳥取県は目指そうと思うんです。

先程申しましたように、鳥取にはいろんな芸術家、文化人があったし、その舞台になり得るんですよ。例えば印象派の絵を思い浮かべてください。パリのまちなかの絵ばかりではないですよ。むしろ郊外のアビニョンだとか、あるいはミレーの「落穂拾い」だとか農村風景だとか、やっぱり芸術というのは自然だとか人の温かみだとかそういうのが必要なんです。そういう意味でいえば、鳥取はそういう芸術が育ってくるのにいいところじゃないかと思うんです。だから、鳥取をそういうふうにつくり変えていこう、アーティストリゾートにしようということ夢見しています。

それに応えてくれたのが「鳥の劇場」というグループです。十数名の劇団員。鳥取の人はいません。みんな東京だとかいろんな所から来た人たちです。主宰者は中島さんで、これは鳥取の方です。そして、このたび芸術選奨の文部科学大臣新人賞を受賞されました。そういう素晴らしい劇団が今鳥取に来ています。全国から来るんですね。それだけではないんです。例えばハンガリーだとか、海外からも来るんです。私はこの人たちに、「BeSeTo」演劇祭というのをやってくれませんかというふうをお願いしたんです。これは、北京、ソウル、東京の頭文字です。3カ国の大都市でやっている国際演劇祭があるというんですね。平田オリザさんが来られたものですから、その「BeSeTo」の「To」は鳥取の「To」じゃないですか、とむちゃくちゃ言いまして、鳥取でもやってくださいと言ったら本当に始めまして、この7月24、25日に鳥取の鹿野町でやります。ぜひ皆さんもお越しいただければと思います。

本当のご静聴ありがとうございました。「あたたしき 年の始めの 初春の けふ降る雪の いや重（し）け吉言（よごと）」、皆さまのこれからの1年間、素晴らしいことが重なり合うようなそういう年になりますように、開講に当たりまして皆さまの門出を心からお祝い申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。